

『狭衣物語』と『百番歌合』

——所収本文をめぐって——

田淵 福子

一

平安後期に成立して以来、『源氏物語』に次ぐ秀作として広く読まれ、後の物語に多くの影響を与えてきた『狭衣物語』は、現代では、その著しい異本群の存在により、物語製作当時の本文を明らかにすることが極めて困難になっている。

こうした状態は、「単なる筆写上の誤りの範囲を越えて、意図的に改作した」^(注1)部分を多く含む上、欠落部分を異なった系統の写本によって補写した伝本が数多く存在するなどといった、複雑な諸本の関係によって生じたものであるとされているが、そうした諸伝本の関係については、現在では三谷栄一・中田剛

直岡氏の研究によって、かなりの部分が解明されている。三谷氏は昭和十年『国文学論究』所載の「狭衣物語系統論序説」に始まる一連の伝本研究によって、主要な伝本を三類（巻一のみ四類）に分類整理され、一方中田氏は、昭和三十三年『国語と国文学』に掲載された「狭衣物語卷一伝本考」とそれに続く研究^(注2)において、主な伝本を二類に分ち、さらに細かく数種に分類するといった方法を採用しておられる。この両氏の研究により、狭衣の伝本研究は著しい進展をみたのであるが、どの本を最善本とみるかについてはなお定説がなく、物語本文に関するより詳細な研究が要求されていると言えよう。

このように複雑な様相を呈している本物語の本文研究には、従来行なわれてきたような、現存諸本の本文自体の研究は勿論

のこと、物語が成立して後、どのような形で読者の間に流布していったのか、といった点についての研究もまた、同様に不可欠であると思われる。

そこで今回は、そうした享受史の一端を明らかにする試みとして、藤原定家の撰になる「百番歌合」を取り上げ、狭衣物語本文との関係から、鎌倉初期に重視されていた本文について考察を加えてみたい。

「百番歌合」（以下、「歌合」と称す）は、周知のように、左方に源氏、右方に狭衣物語の和歌を番え、歌合形式に仕立てたものであるが、その詠まれた場面を明らかにする為に詞書も付されている。それらの中には、伊井春樹氏が指摘されたように、物語本文を文節単位で引用したものから、定家が「部分的に自分の言葉で引用し直」したものであり、物語本文との比較検討は慎重に行なわなければならないのであるが、詳細に見てみると、やはりそこに依拠した物語本文の性格を見出し得るものが少なくないのである。

この歌合と狭衣物語本文との関係については、三谷氏⁽⁵⁾や矢部敦子氏⁽⁶⁾らにより、一部の和歌に関しては触れられているものの、歌合全体と物語本文との関わりという観点からは、なお明らかにされていないのが現状である。

そこで本稿では、物語の筋の展開に即して、歌合に採られた和歌のうちで問題のあるものを取り上げて、検討を加えてみる。なお、両書の調査並びに考察は、当然狭衣物語全編に関して行なうべきなのであるが、物語本文の調査に中田氏の「校本狭衣物語」⁽⁷⁾を使わせて戴いた関係上、校本の刊行されている巻三までのものとさせて戴きたい。

二

まず、物語巻一部分に関する考察を行なう。歌合本文は「物語二百番歌合―風葉和歌集桂切」（昭55・8 日本古典文学会刊）により、また狭衣物語本文は前述の「校本狭衣物語」より引用した。なお、物語の本文引用に際して、校本の底本に用いられている古活字十二行本（所謂流布本）以外の本については、特にことわらない限り、「校異」欄をもとに本文を復元してある。従って、仮名遣いは必ずしもそれぞれの原本通りにはなっていない。

まず歌合二十二番から検討を加えてゆくことにする。

① こひわたるたもといつもかはらねとけふはあやめの
ねさへなかれてと侍ける御かへり 一条院宣耀殿女御

うきにのみしつむくつとなしてはててけふはあやめのね
たになかれず(傍線部筆者、以下同然)

これは、五月五日に、狭衣が宣耀殿女御に贈った歌(詞書
中)に対する女御の返歌を記したものであるが、問題となるの
は詞書に含まれる狭衣の歌である。三谷氏の分類による第一類
(以下、特に記さない限り、諸本分類の呼称は同氏による)を
代表する深川本では、

a こひわたるたもといつもかはかぬにけふはあやめのね
そそへたる

とあり、また第二類の代表である為家本には、

b 恋わたるたもといつもかはらぬにけふはあやめのねさへ
なかれて

とある。また、第三・第四類ともにここでは同じ本文になるの
で、代表として第四類の流布本をあげると、

c 恋わたるたもといつもかはかぬにけふはあやめのねさへ
なかれて

となる。このように、第一・第四類の代表本文を掲げて歌合と
比較してみると、第二・第四類の歌(b・c)は第一類のもの
(a)に比べて歌合本文に幾分近いものの、それぞれ三句目に
相違が見られる。ところが、諸本の中でただ一本、為相本のみ

が、

d 恋わたるたもといつもかはらねとけふはあやめのねさへ
なかれて

とあり、歌合本文と一致するのである。為相本のこの部分は前
後から見て第三類に入ると思われるのであるが、この本のみが
歌合本文と同じである点、注目すべきであろう。

さて、次に六十番の歌、

② あめわかみこのむかへの時

ここのへのくものうへまでのほりなはあまつそらをやかた

みとはみん

天稚御子が狭衣を迎えに降臨した場面で狭衣が詠んだもので
あるが、この歌は伝本によっては含まれないものがある。すな
わち、深川本など第一類の諸本と第三・四類の一部の本には見
えるものの、第二・四類の比較的純粹な伝本とされる為家本や
流布本等には無いのである。前後には第三・第四類の文章を有
しながらこの歌をも含む伝本としては、宮内庁三冊・松井三冊
本などがあるが、流布本等にこの歌が見えないことから推して、
やはりもとは第一類にあったものが、何らかの形でこれら一部
の本に混入したと見るのが妥当であろう。ただし、この混入が
いつ頃起きたものか推定するのは今の段階では困難であり、歌

合本文がどちらに拠ったとも判定することはできない。よって、第一類、並びに第三・第四類の一部の伝本と同じであることを確認するにとどめる。

次に、五番の歌に移る。

③ 嵯峨院の御時、みのしろも我ぬききせむとの給せける

のち、御心のうちに

いろいろにかさねてはきし人しれすおもひそめてしよはの
さころも

これは、帝が女二宮降嫁を約束して後、邸に帰った狭衣が、なお恋い慕う源氏宮への思いを歌に詠む場面である。ここでは、諸本和歌の異同は無いのだが、詞書の「御心のうちに」とある部分に注目して諸本を調べると、深川本には

いろいろにかさねてはきし人しれすおもひそめてしよ
はのさころも

とかへすくいはれたまふ

とあり、その他の伝本についても、一本を除いては皆これと類似した表現になっている。すなわち、これらの本では狭衣が歌を「御心のうちに」思ったのではなく、独り言ながらも口に出して言ったことになる。ところが、前田本一本のみは

色々にかさねてはきし人しれすおもひそめてし夜半の

さ衣

御心の中にいはれ給ふ

となっており、詞書に一致する。この前田本の性格については中田氏が詳しく述べておられるので、それをここで略述させていただと、この本は中田氏の分類では第二類本とされ、一応為家本と同じグループに位置づけられているものの、また同時に、両本間の異同が甚だしい点から、「この両本は全くの同一本とはいへぬ」ともされているのである。しかも同氏によれば、この本は全く別の系統に属する為秀本や為相本等とも交渉があったらしいということで、同本の特異性が注目されるところである。

次に、五十五番の歌、

④ まとろますあかさせ給よ、ほとときすをきかせて給て

よもすからなけきあかしてほとときすなくねをたにもきく
人もなし

これは、前の③の歌を詠んだ翌朝、狭衣がなお憂愁の思いに沈んで歌を詠む、といった場面である。この歌に関しては、三谷氏も触れておられるが、諸本の本文を大凡三種に分類することができ。すなわち、第一・第二類の

a よもすからなけきあかしてほとときすなくねをたにもきく
（一部伝本「ものをやおもふ」）

ほととぎすあまのいわとをあげかたになく

ほととぎすなくねにつけてもたのまる、かたらふこゑはそれならねとも

という二首を並べた形と、第三・第四類の

b 夜もすからなけきあかしてほととぎすなく音をたにもきく人もなし(きく人もなし—流布本のみ「きく人もかな」)

さらに為秀本(静嘉堂文庫本)と為相本の

c 夜もすからなけきあかしてほととぎすなく音をたにもきくひとはなし

ある本に(ある本に—為相本ナシ)

かたらはむなをたちかへれ時鳥おなし心に物やおもふとであり、bの例とcの一首目とが歌合所収のものと一致する。

cの例は、為秀本の「ある本に」という表現からも、第三・第四類の形(即ち「夜もすから」の歌)をもととして、何か別の本を校合して出来た混合本であることが知られる。その「ある本」がどのような本であったのか、現存しないと思われるので知り得ないが、このことから為秀・為相両本の書写当時——中田氏によれば、為秀本は鎌倉末—南北初期、為相本は鎌倉末期頃の写ということである——における狭衣物語本文が、現在残されているものよりも、さらに複雑多様であったろうことは推

測されるのである。

しかし、ともかくここでは、歌合所載のこの歌が第三・第四類に属するものであったと言ふことができる。

次に八番の歌、

⑤ 齋院源しの宮ときこえし時、在中将のきむをしへたる所かきたるゑをたてまつらせ給て

よしさらはむかしのあとをたつね見よ我のみまとふこひのやまかと

まず詞書の傍線を付した部分に適合する本文は、かつて片寄正義氏⁽¹¹⁾によつて指摘されたように、為秀本の

・さいこ中将かひもうとにきんをしたる所かきたるはにほふ兵部卿ならねとめとまり給てあいなうひとつ心なる心地し給て

のみであり、他の伝本では、多少の異同はみられるものの大凡は

・此まともをみ給へは在⁽¹²⁾五中将の日記をいとめてたうかきたるなりけりと見るにあひなうひとつこゝろなるこゝちして

(流布本)

といった表現になっている。

さて、この「在⁽¹²⁾五中将が妹に琴教へたる」場面は、為秀本に

「にはふ兵部卿ならねと」とあったように、源氏物語総角巻にも引かれている。

・在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄りたまひて、(小学館日本古典文学全集一九四頁六行目)ところが、こうした記事に該当する「伊勢物語」の記述は、既に指摘のあるように現存諸本には見当たらないのであり、定家本系も非定家本系も、おおよそ

・むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて

うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをし

ぞ思ふ

と聞えけり。(以下略)

―第四十九段―

といった本文になっている。

この為秀本については、中田氏の指摘によれば、為家・前田・為相本と多くの独自共通異文を持ち、「特殊な交渉を有してゐる」とされているのであり、前に述べた③の詞書が前田本の独自本文と一致していたことを併せ考えれば興味深い。あるいは、百番歌合詞書の拠った物語本文は、為秀本や前田本といった一部の特異な伝本に近いものだったのであるまいか。

さて、和歌の異同についてみると、傍線部「やまかと」の個

所が、大部分の伝本では「道かは」となっており、第一類深川本には「みち(山とも)かは」と併記がある。本文に「やまかと」とあるのは、竹田・押小路・鷹司の三本で、これらはいずれも第三・第四類であると考えられる。

次に四十二番の歌の考察に移る。

⑥ 齋院源しの宮ときこえし時

我はかりおもひこかれてとしふやとむろのやしまのけふり
にもとへ

この歌は、深川本(第一類)には

・かくはかり思こかれて年ふやとむろのやしまのけふりにも
とへ

とあり、為家(第二類)・為相(第三類)・流布本(第四類)の各本もこれと同文である。その他「いかはかり」(平出・内閣)「かはかり」(竹田・押小路・黒川)とする本もあり、この歌の初句にはかなりの異同が認められるのであるが、その中で、為秀・宮内庁三冊・松井・京大・鷹司の五本は「我はかり」となっており、歌合に一致する。これらは、この前後の部分においては、ほぼ第三あるいは第四類に属する本文を有するものである。

次の歌に移る。十二番、

⑦ みちのしるへをおもひしらはとまれとはいひてましと

うらみさせ給ければ ますかゝるの君

とまれともえこそいはれねあすか井にやとりとるへきかけ

し見えねは

仁和寺の法師に誘拐された飛鳥井が袂衣に救われ、家まで送り届けられた場面で詠まれたものであるが、この歌は下句に諸本異同が見え、五種にわけられる。

aとまれともえこそいはれねあすか井にやとりとるへきかけ

しなければ(深川本・宮内庁三冊本他)

bとまれともえこそいはれねあすか井にやとりはつへきかけ

しなければ(内閣本・流布本他)

cとまれともえこそいはれねあすか井にやとりはつへきかけ

し見えねは(為秀本・京大本他多数)

dとまれともえこそいはれねあすか井にやとりとるへきかけ

きならねは(宮内庁三冊本・松井三冊本)

eとまれともえこそいはれねあすか井にやとりとるへきかけ

し見えねは(鷹司本・為家本)

右のように、歌合本文はeの二本に一致することになる。この部分は両本とも第二類に属している。

次に、八十四番の歌、

⑧ ますかゝるの君ゆくへなくなりしころ、おはしまささ

りしよ御ゆめに

ゆくへなく身こそなりなめこのよをはあとなきみつをたつ

ねても見よ

この歌については、三谷氏⁽¹³⁾が既に述べられたように、諸本の本文をおおよそ三種に分類し得る。すなわち、

aゆくゑなく身こそなりなめこのよをはあとなき水をたつね

てもみよ(深川本・宮内庁四冊本・流布本他)

bこの世をはいつか見るへきわかれゆくおほろのし水すます

なりなは(為家本他)

cこのよをはいつかみるへきうきしつみあとなきみつにたつ

ねわふとも(為相本他)

の三種類であるが、その他に前田本では

dたのむれとこよひはかりの契にてわかる、道はとまりやは

する

となっており、蓮空・大島の両本にも、cの歌の後に、「ある本に」としてこれとほぼ同じ歌が併記されている。

さて、百番歌合の和歌はaと一致し、すなわち第一或いは第三・第四類に拠ったことになる。三谷氏が述べておられるよう

に、「第三系統に第一系統で校合した形」であると見るのが妥

当であろうが、ここでは第一類と第三・第四類のうちの一部伝本が歌合本文に一致するものであることを述べるにとどめる。

さて次に六十八番の歌に移る。

- ⑨ ときはのやまさとにてかきりにおほえければ あすか
ぬなからへてあらはあふよをまつへきにいのちはつき
ぬ人はとひこす

この歌は、詞書から判断して巻一の最後あたりに位置すると考えられているが、既に指摘のある通り、現存諸本には見られないものである。この例からは、少なくとも定家が歌合を選ぶにあたって使用した本文が、現在そのままの形では残っていないことが分かる。

三

続いて、物語巻二部分に関して検討を加える。まず六十四番の歌、

- ⑩ あすかみゆくへなくなりてのち
おもひやる心いつくにあひぬらむうみ山とたに知らぬわか
れに

この歌は、女二宮に逢って後もお飛鳥井姫君を忘れられぬ

狭衣が詠んだものである。諸本を見ると、第一類深川本・第三類流布本では

a おもひやる心そいと、まとと—流布本「よ」ひぬる海

山とたにしらぬわかれば(は—流布本「に」)

とあって異なるが、九条家本(第二類)では歌合本文に一致している。その他、同じ第二類の高野本、第三類でも武田本等多くの本が歌合と同文である。第一類に属する伝本は、深川本と同じか、或いは「心そいと、まよはる、」となっており、ここでは、歌合本文は第二あるいは第三類に依拠したものと見ることが出来る。

次に七十六番の歌、

- ⑪ 三条の宮にしひてまゐりていけにたちみるをしのこ
ゑをきかせ給て

我はかりおもひしもせしふゆの夜につかはぬをしのうき
なりとも

これは、出家した女二宮のもとへ狭衣が忍び入ろうとする場面でのものであるが、ここで注目したいのは、詞書に見える「こゑを」という表現である。該当部分を第一類深川本で見ると、

a いけにたちみるをしのをとなひつかはぬにやとみ、と、ま

り給て

とあり、また第二・第三類でもここは「音なひ」となっている。この「音なひ」は、ここでは言うまでもなく「声」の意で用いられているのであるが、やはり表現に相違があるのは見過しがたい。そうした中で、前田本のみは独自本文で、

b いけに立るるをしの声もおなし心におほされて

と、歌合と同じ表現になっており、注目される。前述の巻一における③の詞書でも前田本との一致が見られたこともあり、両者の関係は興味深い。

三十二番の歌に移る。

⑫ 源しの宮の御かたにゆき山つくるを御らむして

もえわたるわか身そふしの山よた、ゆきにもきえずけふり

たちつつ、

これは、女房たちに雪山を作らせて興じている源氏の宮を見た狭衣が、改めて宮の美しさにひかれて詠んだ歌である。深川本他第一類諸本と第二类（九条家・高野本）では、ともに歌合と同文であるが、流布本他第三類の諸本では傍線部が「ゆきつもれとも」とある。また、この歌の前後の本文は極めて異同が激しく、多くの伝本は、第三類の本文を中心にして第一・第二類の本文を混入した形になっているのであるが、そうした混合

本を見ると、吉田・鎌倉・武田・前田本などは「ゆきにもきえず」「押小路・鷹司本などは「ゆきつもれとも」となっている。

これらは、前者が第一・第二类の本文を比較的多く混入しているのに対して、後者はその混入の割合が少ないという違いがあり、以上のことを併せ考えれば、本来の形は、第一・第二类が「ゆきにもきえず」、第三類が「ゆきつもれとも」であったと推定できよう。従って、歌合本文は、ここでは第一或いは第二类によつたものと思われる。

次に二十八番の歌、

⑬ ゆきのあしたいくよへぬらむたけのはにと侍し御かへ

り 齋院

すゑのよもちきりやはするくれたけのうは、のゆきをなに
たのむらむ

この歌は、春宮から源氏の宮へ送られた文に対する返歌を狭衣が代作したものである。

さて、この歌には特に異同が多く、各類の本文をそれぞれ掲げると、次のようになる。

a ゆくすゑもたのみやはするたけのはにか、れるゆきのいく

よともなし（第一類深川本）

b 行末も契りやはするくれ竹のうは葉の雪のなに（た脱カ）

のむらん（第二類九条家本）

cすゑの世もないたのむらんたけの葉にかゝれる雪のきえも
はてなて（第三類流布本）

このように、歌合の本文とはいずれも異なっており、その他の伝本にも一致するものは見られない。そうした中で最も歌合本文に近いものは第二類で、歌合の「すゑのよも」が「行末も」となっているほかは同じである。従って、ここでは第二類に近い本文であるとしておきたい。

次に五十二番の歌、

⑭ あすかるのことおほしいて、

からとまりそのみくつはなかれしをせ、のいはなみたつ
ねてしかな

道成から飛鳥井姫君の投身の事実を聞いた狭衣が、形見の扇を手に涙する——といった場面で詠まれたものであるが、この歌の傍線部「のいはなみ」は、第一・第二類の諸本では「のいはま」とあり、流布本・黒川本他第三類諸本では歌合と同じく「のいはなみ」となっている。従って、ここでは第三類の本文に拠ったものと考えられる。

続いて三十番の歌、

⑮ さいゐんに

神やまのしるしはかくれしへのはそゆふをまかくるかも

水かき

源氏の宮が斎院になる準備段階として、いよいよ大式の家に移り住むというその二日前、狭衣が宮を恨んで詠んだ歌であるが、この歌について各類の本文を掲げると次のようになる。

a 神かきやしるし葉かくれしへのはそゆふをまかくるかも

水かき（第一類深川本）

b 神山のしるし葉かくれしへのはそゆふをまかくるかも

は浪（第二類九条家本）

c 神山のしるしはかくれしへのはそゆふをまかくるかも

つかき（第三類流布本）

右のように、第一・第二類はそれぞれ一句ずつが歌合のものとなっており、全く一致するのは第三類流布本である。その他、第三類の諸本と、第二・第三類の混合本数本がこれと同文になっている。ここでも、歌合本文は第三類に拠っているのである。

次に、五十番の歌に移る。

⑯ 高野にまいらせ給とて

うきふねのたよりにゆかむわたつうみのそことをしへよあ

とのしらなみ

これは、吉野川の渡り舟に乗った狭衣が、飛鳥井姫君のことを思つて詠んだものである。

この歌は、第一類のみ第二句が異なっており、

・うきふねのたより㊦もみんわたつうみのそことをしへよ跡
のしらなみ（深川本）

となつてゐるが、第二・第三類の諸伝本はいずれも歌合と同文である。

四

続いて、卷三部分に関する考察を行う。

まず六十六番の歌、

⑩ あすかみなくなりてのちときはにはおはして

秋のいろはさもこそ見えめたのめしをまたぬいのちのつら
くもあるかな

傍線部「見えめ」に当たる部分を、各類を代表する伝本で調べると、第一類深川本・第二類九条家本・第三類流布本のいずれもが「あらめ」となつてゐるのであるが、それ以外の伝本を見ると、歌合本文に一致する為家・吉田・鎌倉・松浦・松井の五本が存在する。

為家本は、三谷氏の御調査(15)による表を見ると、第一類をベースにしながら、所々に二類、ごく稀に三類の本文を混入したものであり、この前後の本文を調べると、第一類本文に依つてゐると思われる。また鎌倉本は、岩垂(16)氏の御研究によれば、第一類から生じた本を土台にして二類・三類をも多く混ぜた、所謂「混合本」であるということであり、このことは勿論、鎌倉本と「ほぼ同一本」(17)であると言われる吉田本についても同様である。両本のこのあたりの本文は、大凡第一類によつてゐるものの、途中で独自の省略があり、断定はできない。また松井・松浦本は、ともにこの前後が第三類の本文となつてゐるが、一部数行にわたる独自の省略があり、これも純粹な第三類本文とは言い難いようである。とにかく、この部分で歌合と一致する本文を持つのは、第一類或いは第三類に近い位置にありながら、やや特殊な伝本であると言ふことができる。

次に、三十一番の歌に移る。

⑪ すゑこす風をと侍りければ 嵯峨院第二内親王

うき身には秋そしられしおきはらすゑこすかせのをと
なわねとも

この歌は、狭衣から贈られた文の端に女二宮が書きつけたものであるが、上句に大きな異同が見られる。各類の代表伝本を

見ると、第一類（深川本）・第二類（九条家本）ともに「みに
しみて秋はしりにき」、第三類流布本では「うき身には秋もし
らる、」とあり、流布本が一番近いものの、やはり相違が見ら
れる。歌合と一致するものは、吉田・鎌倉・鷹司の三本のみで
あるが、このうち吉田・鎌倉の両本は前後に第一類の本文を有
し、一方鷹司本は第三類に属する本文である。流布本が歌合本
文に近いものであったことから考えれば、本来第三類にあった
「うき身には……」の歌が、混合本である吉田・鎌倉両本に取
り入れられたと見るのが自然であろう。

次に四十九番の歌、

⑱ 一品宮にはじめてまいらせ給へりけるあか月一条の宮

にひと、ころなかめおはしまして

しらせはやとこよはなれしかりかねのおもひのほかにこひ
てなくねを

この歌の傍線部「しらせはや」に一致するものは現存諸本に
なく、すべて「きかせはや」となっている。従って、ここは歌
合の独自本文となっているのである。

次に四十番の歌、

⑳ とうたう一品宮におはしましそめたりしあしたにたて

まつらせ給ける

またしらせあか月つゆにをきぬれてやへたつきりにまとい
ぬるかな

一品宮に冷淡な袂衣が、父からの催促を受けてやつと後朝の
文を贈る、という場面である。この歌の「をきぬれて」は、各
類の代表本文を調べると、いずれも「おきわびて」とあり、そ
の他の伝本でも殆んどは「おきわびて」或いは「おき別れ」と
なっている。その中でただ一本、文禄本のみが「おきぬれて」⁽¹⁸⁾
とあり、歌合と同じである。この文禄本は、中田氏の分類によ
れば、第一類第二種本（流布本の属する系統）に入れられてい
るのであるが、流布本とはかなり性質を異にした本であると思
われる。この前後の部分でも流布本と比べて異文が目立ち、一
概にどの類とは断定し得ない。

次に八十八番の歌、

㉑ 齋院の御けいの日

みそきするやをよろつよの神もさけもとよりたれかおもひ
そめてし

この傍線部に各類で異同が見られ、まず第一類では「もとよ
りたれかおもひそめし」とあり、第二類では「われこそさき
に思そめしか」、第三類では「われこそしたに思ひそめしか」
と、程度の差はあるものの、いずれも異なっている。歌合と一

致するのは、諸本の中で吉田・鎌倉本の二本のみであるが、両本は、ここでは前後に第一類の文章を有しており、この歌自体も前に掲げた第一類のものに近いことを考えれば、やはり第一類の中に入る一部の伝本によつたと考えるべきか。

次に七十一番の歌に移る。

⑳ はしめてほん院にいらせ給て

さいみん

をのれのみなかれやはせむありすかはいはもるあるしいまはたえせし

この「いまはたえせし」にあたる部分が、第一・第二類では「われとしらすや」となっており、第三類流布本は歌合に一致する。また流布本以外には、四季・宝玲・内閣・為家・吉田・鎌倉・前田・文禄・淡川・黒川・平出・京大の各本が同文となつている。これらの本について、この歌の前後の文章を調べると、四季・鎌倉本が第一類、前田・平出本は第三類、京大本は第二類に属するものであり、ここにも諸本の複雑な交渉の跡がうかがえるのである。

次に二十一番の歌、

㉑ 齋院にてまつりの日あふひを御らむして

見ること心さはかすかさしかななをたにいまはかけしと思に

この傍線部に該当する部分を、各類の代表伝本で見ると、いずれも「みるたひに心まとはす」とあり、またその他の諸本にも全く同一のものは見出し得ないのであるが、類似のものとしては次のようなものが挙げられる。

a 見るま、に心さはかすかさしかななをたに今はかけしと思

に(文禄・松浦・押小路本)

b 見るたひに心さはかすかさしかななをたに今はかけしと思

に(蓮空・鈴鹿・雅章・書陵部・前田・竜谷・中田本)

いずれも初句が歌合とは異なるものの、「心さはかす」は同じである。この前後の文章を見ると、文禄・押小路本は第三類、蓮空本は第一類、鈴鹿・中田本は第三類の本文を有するものである。

七十四番に移る。

㉒ 一条の院の御時弘徽殿女御の御方にて嵯峨御世のこと

おほしめしいて、

あかさりしあとやかよふといそのかみふるの、みちをたつ

ねてそとふ

この歌は、女一宮が入内して後、几帳を隔てて見える宮の衣の裾に、ふと女二宮の美しさが思い出されて、袂衣が詠んだものである。傍線部「とふ」に当たる部分は、各類の代表伝本で

はいずれも「見る」とある。歌合に一致する本文を持つのは、四季・宝玲・内閣・文禄の四本であり、前の三本は第一類、文禄本は第三類に属すると思われるものである。

次に七十五番の歌、

②⑤ さかの院にて入道の宮の御かたにて

ましてはし山のはめくる月たにもうきよにわれをと、めさ
らなむ

女二宮の曼陀羅供養の夜、狭衣が女二宮に近づく場面で詠まれた歌であるが、傍線部「うきよにわれを」は、第一・第三類の代表本文においては「うきよにしはし」となっているが、その他の諸本では、為相・鈴鹿・雅章・書陵部・前田・鷹司・東大の七本が歌合に一致する。この歌の前後の文章を調べると、為相本は第一類に近く、鈴鹿本以下六本は第三類に入るのであり、本来は第三類の本文であった「うきよにわれを」が為相本に混入されたとも考えられる。

四十五番の歌に移る。

②⑥ よをおほしすてけるよ齋院よりいてさせ給とて

なみたのみよとまぬかはとなかれつ、わかれのみちはゆき
もやられす

出家を決意した狭衣が、それとなく若宮に別れを告げる場面

で詠んだもので、巻三最後に位置する歌である。これは歌合本文自体に異同があり、定家自筆本の属する後稿本に対する前稿本の群書類従本では、「わかれの」が「わかる、」とあり、僅かながら相違が見られる。

さてこの歌について、第一類深川本を見ると、

a なみたのみよとまぬかはとなかれつ、わかる、みちのゆき
もやられぬ

とあり、第三類流布本では

b 涙のみよとまぬ河となかれつ、わかる、みちそ行もやられ
ぬ

となっている。なお、第二類の九条家本は落丁のためこの歌が欠落している。その他の諸本を見ても、定家本と全く一致するものは見出し得ないのであるが、群書類従本と同一で、かつ定家本に最も近い本文としては、

c 涙のみよとまぬ河となかれつ、別る、みちはゆきもやられ
す(為家・吉田・鎌倉・京大本)

を挙げることができる。為家・吉田・鎌倉本は第一類、京大本はこれ以前の部分を踏まえて考えれば第二類に属するものと判断される。

歌合番号	歌	第一類(深川本)	第二類(九条家本)	第三類(流布本)	その他の諸本
六十六番	歌				○(為家・吉田・鎌倉・松浦・松井本)
三十一番	歌				○(第三類・吉田・鎌倉本)
四十九番	歌	△	△	△	△(第一・第三類)
四十番	歌				○(文禄本)
八十八番	歌				○(吉田・鎌倉本)
七十一番	歌			○	○(為家・吉田・鎌倉・文禄本他)
二十一番	歌				△(第三類)
七十四番	歌				○(第一類・文禄本)
七十五番	歌				○(第三類・為相本)
四十五番	歌				○(為家・吉田・鎌倉・京大本)

卷三

④ ○印は歌合本文に一致するもの、△印は完全には一致しないが近いと思われるものを示す。

・「その他の諸本」の項は、() 内に、混合本でその属する類が明らかでない場合には写本名を、属する類が明らかである場合にはその類の名称のみを記してある。従って、例えば巻三の三十一番の場合、第三類に属するいずれかの伝本と、どの類に属するかが明らかでない吉田本・鎌倉本とが歌合本文に一致することを意味する。

まず巻一部分に関しては、第二・四類、特に第三・第四類が するが、これらはいずれも第三あるいは第四類にも共通する本歌合本文に一致することが多い。第一類でも二首が歌合に一致 文であり、第一類独自のものではない点を考えれば、第一類と

歌合との本文の關係は希薄であるとして差し支えないであろう。なお、六十八番の歌が物語現存諸本に見えないことからして、歌合の依拠した本文が今日そのままの形で伝わっていないことは明らかであるが、おおよそ第三・第四類を基としながら、第二類の本文をも交えた形の本文であったと推定し得る。また、詞書が前田本や為秀本といった一部伝本の独自異文に拠っている点は注目される。

卷二部分に関しても、やはり第一類との關係は薄く、第二・第三類を混合した形の本文に拠ったものと推定されよう。この卷でも七十六番詞書に前田本の独自異文との一致が見られ、卷一における例と併せて、詞書の本文の性質が興味深いところである。もともとからこうした本文を持つ伝本に拠ったものが、或いは歌合本文に手直しが加えられた折に、詞書と和歌とが別の本によって直されたのか、現段階では明らかにし得ないのであるが、とにかく、詞書と歌とが本文の系統を異にしていることは明確であると言えよう。

卷三部分においては、多くの和歌が、各類の代表的伝本とは異なり、吉田・鎌倉・文禄・為家本といった一部の伝本と一致しているのが注目される。このうち鎌倉本については、風葉和歌集においても卷三部分で多くの歌の一致の見られることが既

に指摘されて⁽¹⁹⁾おり、これらのことを考えれば、鎌倉期には、卷三部分に関してはこの種の本文が広く行なわれていたものと推定し得るのである。

以上のように、「百番歌合」に採られた「狭衣物語」本文は、卷一部分では第二・第三・第四類の混合本文、卷二部分では第二・第三類の混合本文、卷三部分においては鎌倉本等一部の特殊な伝本に近い本文であったと考えられる。こうした事実は、「狭衣物語」本文が鎌倉期の段階で既に複雑に混合され、それが広く流布していたことを示していると言えよう。

卷三における鎌倉本・文禄本等諸本間の本文の關係など、なお解明すべき点は多いのであるが、後考を俟つことにして、本稿ではこうした事実を指摘するにとどめておきたい。

注(1)「研究資料日本古典文学①物語文学」(昭58・9・明治書院刊)「狭衣物語」の項、二四一頁。

(2)「狭衣物語の伝来」(昭17・6「国文学論叢」)、「狭衣物語卷二の伝来と混合写本生成の研究」(昭32・9「実践女子大学紀要」)、「狭衣物語卷三の伝本系統と流布本本文の研究」(昭34・12「実践女子大学紀要」)等。

(3)「狭衣物語卷二伝本考」(昭34・9「国語と国文学」)、「狭衣物語卷三伝本考」(昭43・10「国文学論集」上智大学)。

「狭衣物語卷四伝本考」(昭45・11)『国文学論集(上智大学)』
等。

(4) 伊井春樹氏「物語二百番歌合の本文」(『語文』第四十八
輯、昭62・2)

(5) 三谷栄一氏は「狭衣物語の異本成立とその時期」巻一を
中心として——(『国学院大学紀要』第七巻、昭44・2)に
おいて、「物語二百番歌合」中の「百番歌合」に用ゐられて
源氏物語の歌と番へられてゐる狭衣物語の本文は、歌から判
断する限り第三類系のものである」としておられる。

(6) 矢部敦子氏は、「狭衣物語第二系統の成立」(『国語国文』
第三四巻八号、昭40・8)において、歌合に採られた二首の
狭衣物語歌が流布本に存しないことから、歌合の依拠した本
文は「流布本すなわち第三系統以外であった」と述べておら
れる。

(7) 『校本狭衣物語』巻一・巻二・巻三(桜楓社刊、昭51・
53・55)

(8) 吉田幸一氏「深川本狭衣とその研究」(『古典文庫刊』昭
57・12)による。

(9) 「狭衣物語卷一伝本考」(『国語と国文学』昭33・5)
(10) 注(5) 論文参照。

(11) 「傳為秀雅狭衣物語古寫本に就いて」(『書誌学』第四
巻一號、昭10・1)

(12) 注(9) 参照。

(13) 注(5) 論文参照。

(14) 「定家自筆本 物語二百番歌合と研究」(『未刊国文資料

刊行会刊、昭30)など。

(15) 「狭衣物語卷三の伝本系統と流布本本文の研究」(『実践
女子大学紀要』昭34・12)所載の表による。

(16) 「鎌倉本狭衣物語の本文の系統——巻三に関する考察——」
(『寝覚物語対校・平安文学論集』所収、昭50・9)

(17) 中田剛直氏「狭衣物語卷一伝本考」補遺(『国文学論
集(上智大学)』昭46・12)による。

(18) 「狭衣物語卷三伝本考」(『国文学論集(上智大学)』昭
43・10)による。

(19) 注(16) 参照。